

コーナー展

火縄銃の種類と江戸時代後期の鉄砲

3/12→4/15

火縄銃は、筒先から火薬と弾丸を入れ、火皿に点火薬を入れ、引き金を引くことによって火縄が火皿に落ちて発火し、筒の中の火薬に引火して爆発させて弾丸を飛ばす仕組みの鉄砲です。

日本には、戦国時代後期に当たる16世紀中頃もしくは、それより少し前に伝えられていたともいわれていますが、16世紀中頃以降全国的に普及し、刀・槍・弓などで戦う時代から鉄砲が戦の勝敗を決する武器になっていきました。

江戸時代になると、戦はほとんどなくなり、平和な時代が訪れますが、その陰では、火縄銃の改良をはじめ、いろいろな銃器の研究が行われました。

本展では、江戸時代に製作された火縄銃を中心に、気砲(きほう)、フリントロック銃、傍装雷火銃(ぼうそうらいかじゅう)、管打銃(かんうちじゅう)など36点や火縄銃の弾丸、早合(はやごう)、口薬入(くちぐすりいれ)、胴乱(どうらん)などを併せて展示しています。

こうした江戸時代のさまざまな鉄砲を一堂に集めて見ることのできる機会は今にもありません。みなさまの御来館をお待ちしております。



細筒(ほそづつ)

弾丸の重さが3～5匁(もんめ)程度のものを細筒といいます。1匁は、3.75gで5円玉1枚の重さとほぼ同じです。こうした小口径の銃は、害獣駆除など狩猟用に使用されることもありました。



中筒(ちゅうづつ)

弾丸の重さが10匁(もんめ)前後のものを中筒といいます。侍筒(さむらいづつ)とも呼ぶこともありました。



大筒(おおづつ)

弾丸の重さが50匁(もんめ)以上のものを大筒といいます。重いので、土のうの上に置いて使用したりしました。



長筒(ながづつ)

口径の割に銃身の長いものを長筒といいます。銃身が長いので射程距離も長くなります。城郭の狭間(はざま)などから狙い撃ちするのに適しています。



馬上筒(ばじょうづつ)

馬に乗った状態で射撃をするための銃で、扱いやすくするために普通の火縄銃よりも銃身が短くなっています。両手で撃ちます。



短筒(たんづつ)

片手で扱うために、馬上筒よりさらに銃身が短くなっています。馬上でも使います。

なっています。馬上でも使えます。



気砲(きほう)

空気ポンプで銃のタンクの中に何度も空気を送り込み、高圧になるまで圧縮し、その力で連続して弾丸を発射できる空気銃です。



フリントロック銃

火縄の代わりにフリント(火打ち石:すいせきともいう)が付いており、これが落ちて当たる部分に金属がついており、当たった衝撃で火花を発生して発射する仕組みになっています。



傍装雷火銃(ぼうそうらいかじゅう)

速射ができるように工夫された銃です。通常の火縄銃が2発撃つ間に7発発射ができたと言われています。



管打細筒(かんうちほそづつ)

火皿の代わりにニップルといわれる管に金属製の雷管(中に火薬が入っている)を装着し、引き金を引いてハンマーでたたくことで発火し、銃身内の火薬を爆発させて弾丸を発射する方式の銃です。



洋風管打短筒(ようふうかんうちたんづつ) 上の銃と同じく火縄を使わない管打式の短筒で、洋風のデザインに仕上げられています。



早合(はやごう)

1本の筒の中に弾丸と火薬がセットされており、発射までの時間を短縮することができます。

胴乱(どうらん)

早合などを収納して携帯するための鞆(かばん)です。